徳大生大活躍！［取材］

Gambaru Tokudaisei

右から　齋藤さん、藤田さん、坂東さん、藤島さん、大西さん

阿波踊りの魅力をニューヨークで披露

坂東 玲子
（ばんどう れいこ）
総合科学部 社会創生学科 3年

徳島県出身者のグループ「ホーム・アイランド・プロジェクト」（本部　東京、以下ＨＩＰ）は、ニューヨーク（以下ＮＹ）在住の日本人が、日本の特産品を販売したり、日本文化を紹介するイベント「ジャパン・ブロック・フェア」で、今年３回目の阿波踊りの公演を行いました。今年は徳大からも５名が参加。そのリーダーとなったのが、昨年ＮＹで踊った経験のある坂東さんです。

坂東さんは友だちの藤田千晶（ふじた ちあき、総合科学部 社会創生学科３年）さんから共通の先輩を通じてＨＩＰのことを聞き、その活動に賛同。

「私はジャズでもクラシックでも踊りが大好き。もちろん阿波踊りも。去年初めて参加して、とても魅力ある企画だったので、ぜひ今年もと思っていました。楽しい仲間たちと、徳島の文化をＮＹで紹介できてよかったです」

藤田さんは昨年は残念ながらＮＹには行けませんでしたが、今年こそはと参加。

「小さいころから、自分の可能性を知りたいと、何にでも挑戦しています。不可能という文字が嫌いなんです。英語は苦手なんですが、ＮＹでどれだけ自分がやれるか挑戦したかったんです。多くのことを学ぶことが出来、残りの学生生活をどうしていくのか、考えるきっかけにもなりました」

藤島由梨江（ふじしま ゆりえ、総合科学部 人間文化学科３年）さんは、

「このチャンスを逃すとなかなかＮＹなんか行けないし、学生時代にしかできないと思って参加しました。向こうの方も皆さん阿波踊りに感動してくださって、徳島県人で良かったと思いました」

齋藤芙美（さいとう ふみ、総合科学部 人間文化学科３年）さんは、

「徳島で生まれながら、阿波踊りは見るだけでした。徳島にも特に愛着はなかったんですが、今回参加して、徳島を愛して良くしようという方々と知り合って、驚かされました。自分たちの文化に誇りを持つことの大切さをることができ、参加して良かったです」

大西貴斗（おおにし たかと、工学部 機械工学科２年）さんは、５人の中で、唯一県外（岡山）出身。

「岡山の文化は好きですが、徳島も良いところです。特に阿波踊りは気に入りました。それをＮＹで踊るなんて楽しそうだなと思って参加しました。個人的にはもっと英語を勉強しておけば、もっと楽しめたかもしれません」

徳島に対する思いも、参加の理由もそれぞれですが、皆さん故郷の文化をちょっと見直し、自分たちの住む町を好きになるきっかけになったようです。

最後に、坂東さんからアピール。

「あなたにも参加するチャンスがあります！来年、世界の中心ニューヨークで四国を思いっきりＰＲしてみませんか？　参加希望の方は、ＨＩＰのホームページへアクセス！」

NYでの活動をYOUTUBEでご覧いただけます。
http://t.co/akhNgo8j

Home Island Project (HIP)の
公式ホームページ
http://www.hipj.net/

魅力ある授業［取材］

大学院
ソシオテクノサイエンス研究部
情報ソリューション部門
感性情報処理大講座 講師
森田 和宏
（もりた かずひろ）

森田先生の授業は「プログラミング入門」。対象は一年生。コンピュータのプログラムを作るには、いくつかのプログラミング言語というものを用います。授業ではその中で最もポピュラーな「C言語」の基礎を学びます。

一般の方にわかりやすく言いますと、プログラミング言語は外国語を勉強するようなもので、作文するように単純な命令でプログラムを組み立てます。つまり「ここからここまで一本の線を引きなさい」のような命令を積み重ねていき、複雑なプログラムになります。プログラムが出来上がると、さらにコンピュータにわかる言語に変換して、はじめてコンピュータで動くようになるのです。

「うまくしゃべるのは苦手」と、授業の前半はプロジェクターを使って講義。写真やイラストを使った、わかりやすい画面作りに苦心しています。後半はＴＡ（ティーチングアシスタント）や助教の先生のサポートを得ての実習となっています。

先生は中学の時に初めてパソコン（当時はウインドウズのように簡単に使えるものではありませんでした）を買ってもらい、興味を持ち、この道に進んできました。本学大学院を２０００年に卒業後、ずっと後学の育成に力を注いでおられます。

当時の徳大にはプログラミングの講義はなく、様々試行錯誤しながら今の授業の形を作ってきました。

「実習をメインとするのは、自分で学習することが大切だからです。そのためにわかりやすい資料も用意します。中間期には試験をして、学生の進み具合を見ています。また学生の数が多いので、ＴＡや他の先生方がサポートしやすいように席の配置なども考えています。Ｃ言語は英語の授業のようで、苦手な学生もいますが、自分がプログラミングしたものが実際にパソコンで動くのを見ると楽しさがわかってきます。そういう方向に持って行けるように、今後はもう少し実習を長くしたり、さらに工夫していきたいですね」

基礎講座ですから、複雑なプログラムまでは進みませんが、プログラミングは物作りに共通する、出来上がったときの喜びがあります。先生の目標も物作りの喜びをプログラミングを通じて経験してもらうことにあります。